



佐渡の島影がくっきり見える日没は、已に秋の気配が深まりつつある兆である。

夏らしい日を迎えることなく終る今夏か。



寺泊の花火は何と言っても海中海空が圧巻。

光となることのない半分もエネルギーとなって光の部分を支えているように感じられる。



海岸の広場での民謡の輪踊り。

夏の夜には踊りが似合う。最近は盆踊りが低調で淋しい。

復活の妙案はないものか。

百日紅の咲かない夏



月刊 第 565 号

梅雨明けの発表があったかと思つたら忽ち台風が来ると言う妙な夏で、しかも台風のコースは寺泊にとっては最悪の越佐海峡を通過するらしいと言う。

一週は幸い晴天に恵まれ、サマーフェスティバル、花火大会も何とか天候は持ちこたえてくれたのに何たる不運な夏と、店はたむむわけに行かず、さりとて台風には耐える程の造りではなし、え

え假よと腹をくくって、各家庭でも戸閉りを固くして身構え、港では漁船、釣船が互に身を寄せするように敷重に係留、まさに荒しの前の静けさ、風はそよとも動かず海もしんと静り返っている。海に生きる漁師さんは長年の経験でそれぞれ天気見が上手い。今は漁師をやめてしまった家にもたいてい針(晴雨計)があつて、嵐が近づくと「針が立つ」と言う。平常の気圧に合わせて当て針と言う目印の針が設定されており気圧が低くなると所謂針が立った状態になる。「こーぎ針が立った」と言えば大荒れになると言うことになる。

勿論この日も当然「こーぎ針が立った」のであるがどうしたことが待てど暮らせど一向に風は吹かずテレビ放送は已に山形を通過と言う。日本海を通った台風は吹き返しの風が強いことになっているのだが、これも全く異常ないままに終つてしまつた。

北海道に上陸したあと相当の被害をもたらした台風であつたが寺泊に関しは何が何やらさっぱり解らないままに終つてひとまずほっとしたもののいつまでたつても夏らしい日の巡つてくることのないままに終つてゆく今年の夏であります。

夏になると凌霄花のだいだいで色と紅い百日紅の花房が町のあちこちを色どり、特に寺の境内には必ずと言っていい程百日紅の古木があり、色々な思い出に重なるようにこの花との数々の出会いがあるのですが、その百日紅が咲かない夏なのです。

百日紅の名の如く夏と共に花開き秋の涼風が吹くまで咲きつづけ夏の色どつてくれるこの花が咲かない夏は何か忘れ物をしてるような落着かない夏であります。

サマーフェスティバルからお盆にかけて帰省していたなつかしい顔も潮の引くように見えなくなり、月末最終の日曜を待たずに浜茶屋も店をたたみはじめたに居心地の悪いままに終つてゆく夏です。しかも残暑が居

墓前の物語

さとう・のぶひと

冷夏です。雨ばかり降っています。梅雨明け宣言のない夏になりました。雌伏の梅雨を抜け出し、からりと晴れ上がった雄飛の真夏へと例年のコースを大きく外れてしまいました。

巷から「おあつーございませう」という時候の挨拶が消えました。涼しい夏は大いに結構と言う人もいますし、心配された夏場の電力不足が解消されたのはいいのですが、このままだと米の出来に影響が出そうです。こういう雨の多い冷夏を好む植物もたくさんあって、雑草はすべて元気がよく、刈っても刈つ

てもすぐ伸びてきます。筆者の小さな畑ではキュウリとトマトがどんどん実をつけ、豊作です。ナスは天候に合わないと思えて全くいけません。米も元々は亜熱帯の植物ですから成長が遅れています。農家の人に米の出来を尋ねると、一様に不安げな表情をします。

食料生産者の不安は国民の不安でもあります。ちょうど十年前の冷夏の際起きた「米騒動」が思い出されます。激動の細川政権下でした。あの時は筆者も、冬から春にかけてブレンド米をだいぶ食べました。今年はそのなことにならないよう願っています。お盆の帰省ラッシュが

終わり、海水浴客、帰省客で賑わった寺泊の浜辺にようやく閑けさが戻ってきました。海水浴が目当ての帰省客にとつて、残念な天候不順でした。しかし、お墓参りを果たして遠い祖先に思いを馳せたり、亡くなった身内を偲ぶには、しとしと降る雨はかえって似合っているような気がしました。

雨のため外に出られなかった分、親戚や一族郎党と過ごす時間が多かったのではないでしょう。普段はほとんど行き来のない親戚と長話ができるのも、祖先が与えてくれた贈り物です。お盆は、一族が寄り集う年一回の素晴らしい機会です。ここ

行く末を想うのです。お盆には思いがけない人物の訪問も受けます。遠縁に当たる人であったり、亡父ゆかりの人であったりするのですが、「お墓参りをしてきた」と言っただけでも顔を出して下さり、仏壇に供物を供えていきます。当方としては恐縮して赤くなったり青くなったり。これも祖先のなせるわざに違いありません。

筆者は、例年この時期、四カ所の墓参りをします。そのうち二カ所はお墓掃除もします。筆者のように複数のお墓参りをする方は、けっこう大勢おられるのではないのでしょうか。子供の頃、父母に連れられてお参りしたお墓には、知らない

人の銘ばかり刻まれていました。そういうものだと思ってお参りはするのですが、自分と縁のない遠い世界のことだと反発を覚えながら手を合わせていました。歳をとるに従って「知っている人」のお墓が増えていきます。その墓前に佇むと、故人となつた人物との交流の記憶がどつと押し寄せます。

最初に襲われる想いは、あの時こうしてやればよかった、ああしてやればよかった、という後悔です。未熟な自分を責めてしまうのです。引き続いて噴き出すのは、あの時、あの条件のもとでは仕方がなかったのだ、というこちらの言い分と弁護です。お墓の中



サマーフェスティバルには寺泊太鼓も出演。
日頃の練習の成果を勇壮な響きで披露。
大勢の観客の拍手に応えた。



町商工会のかつてのお嬢様方も負けてならじとフラダンスで出演。
この笑顔が自信の証し。



三区の水神楽も毎年頑張って祭りを盛り上げる。
少々くたびれかけているので、是非若者の参加をが本音かな。



お墓参りの前日には花市が店開きする。
夜の涼風の中散歩がてらに丁度よい。
お盆の花はアズマギクにオミナエシ。



夕方から夜にかけて日頃静まりかえっている墓地が人出で賑わう。手桶に花束、子供達は盆提灯を下げ、久々に一族郎党連らなつての墓参り。



釣り船は寺泊の産業の一翼を荷負っている。ほんとうにこんなのが三匹も釣れたんです。この外ブリにアジにと大釣果。

の人物は「そうだ、仕方がなかったのだ」とそれを受け入れ、快く赦します。
最後に、お墓の中の人物は「自分の分もしっかり生きろよ」と墓前に佇む者を激励してくれます。これで墓参の仕上がりです。

お盆はこの死者の視線を回復するいい機会だと思えます。

夏を惜しむ

八月も残り一週間、浜公園のステージから若者達のバンド演奏や歌声が晩夏の風に乗って聴こえてきます。

音楽好きの若者達が方々から集って行く夏を惜しむつつ音楽を楽しむ「きなせや」と銘打つての恒例のイベントでは朝から小海浜グラウンドとサッカー大会学生の野球大会とサッカーク大会がくり広げられていたが日も暮れて已に沖には漁火が点々。

誌代御後援		敬称略(順不同)	
函館市	二見	晴義	金五千元
旭川市	外山昌子	昌志	金五千元
東京都	外山勝志	孝蔵	金五千元
	小林六三郎	フミイ	金五千元
	小松	進	金五千元
	勝見	政雄	金五千元
	酢谷	史朗	金五千元
	古村	宏美	金五千元
大和市	後明	眞弘	金五千元
横須賀市	山野	セツ	金五千元
川崎市	石野	ヤヨヒ	金五千元
海老名市	中村	健太	金五千元
松戸市	清水	秀雄	金五千元
船橋市	外山	規行	金五千元
四街道市	小林	政治	金三千元
小平市	矢部		金三千元
金沢市	山谷		金三千元
黒埼町			金三千元

新潟市	龜田町		
伏見	三枝		金三千元
勝本	弘		金五千元
佐藤	ムツ		金三千元
川上	英次郎		金三千元
平井	満智子		金三千元
林	彰英		金三千元
白井	敬之助		金五千元
佐藤	保郎		金三千元
前田	エイ		金三千元
松山	光平		金三千元
松田	千恵		金三千元
小熊	茂		金三千元
旭	トヨ		金三千元
山岡	善二朗		金五千元
泉谷	松治		金三千元
原田	昭吉		金三千元
渡辺	四郎		金五千元
本田	哲郎		金三千元
星	文男		金三千元
竹内			金三千元

寺泊町			
渡辺	哲夫		金三千元
渡辺	昭三		金三千元
渡辺	紀男		金三千元
島田	賢一		金三千元
長谷川	喜代		金三千元
佐野	栄一		金三千元
中川	利郎		金三千元
野村	宏		金三千元
宮村	美隆		金三千元
金十	宏		金三千元
渡辺	正平		金三千元
中野	徳		金三千元
磯浦	一徳		金三千元
納谷	基一		金三千元
丸山	武治		金三千元
竹内	基一		金三千元
解良	重子		金三千元
川島	三重子		金三千元
志田	宏嗣		金三千元
玄徳	寺		金三千元

小波会納涼句会詠草

兼題 夏山・毛虫他当季

朝の陽に

青嶺際立つ神の山

夏の山 外山きよし

樹々青々と暮れ初むる

夏山や 小形 美代

身仕度確と老婦人

むらぎもの 外山 海子

魂よびこむ夏の山

夕日果て 小島 冬扇

稜線円く夏の山

江原 汀子



寺泊のキャンプは知る人ぞ知る人気。
時にはこんなキャンピングカーが勢揃い。
海岸には百以上のテントが並びます。

毛虫這ふ

程の樹はなき狭き庭

斎藤 紫苑

毛虫這う

遙かな光の草浄土

竹内 霍山

陽に透ける

広き葉裏を毛虫這ふ

小島 温石

鳥賊船の

電球透けて花火咲く

内藤 蓮子

伊夜彦の

芥子利かせし心太

観音堂

堂守のごと蝦蟇一びき

水沢 蕉子



人が集まればゴミはつきもの。ゴミ持帰り運動も仲々思
うようには参りません。環境を守るには裏方のご苦労が
大変なのです。

鯉釣りや

朝めし前に五、六匹

矢尻ゆきを

にぎわいし

磯に小波今朝の秋

能登 頑牛

緑青に

染まる梵鐘散戦忌

中村 流瓢

早稲の花

むかし禄高五千石

加勢 白汀

あとながき

北海道から沖縄まで気候の変
化に富んで我が国であるが全国
あげて冷夏に翻弄された今年の
夏も終ろうとしている。
到々海に足を急ぐこともなかつ



寺泊の夏最後のイベントが、ヨネックスレディスオープ
ンゴルフ大会。歓迎の幟が初秋の風にはためきます。
大勢の町民ボランティアが大会を支えます。

とんでもない夏であったが海
水浴のできない日の多い夏は水
族館と魚市場の売上げが上がる
と言うことで、巷間の噂では例
年の一割増以上とか。これから
魚まつり、シーサイドマラソン
と秋のイベントがはじまる。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 新 潟 県 寺 泊 町

ふるさとだより

郵便番号 九四〇―二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二二九番
電話番号〇〇六二二―三五七四五
印刷所 吉野印刷株式会社